

まなびを介した世代間交流の可能性を探る
——大学生の放課後のまなびに関する調査と
米国での高齢者施設の入居者面接から——

蓮見元子*・生駒 忍**・北原靖子***
川嶋健太郎****・佐藤哲康*****

Considering the Possibility of Interchange between
Generations through Learning

Motoko HASUMI, Shinobu IKOMA, Yasuko KITAHARA,
Kentarō KAWASHIMA, Tetsuyasu SATO

要 旨

本研究の目的は、人はいくつになってもまなび続ける存在であり、主体的な活動としての「まなび」がこころ（脳機能）の健康につながるという視点に立って、まなびを介した世代間交流の可能性を探り、まなびとこころの健康との関連を検討しようとするものである。本研究の第一の目的は、大学生・高校生・中学生の放課後のまなびを中心とした生活実態を把握することである。第二の目的は、長寿化・高齢化の先進国である米国の高齢者施設を訪問し、実際に入居している高齢者に面接をして、高齢施設生活者のまなびの意識を明らかにすることである。

本調査対象は546名の大学生と高校生200名、中学生200名。米国の高齢者施設に入居する1名の後期高齢者である。主要な結果は放課後のまなびは大学での勉強の予習復習に勤しむことに繋がり、さらに自我同一性の獲得や将来展望につながるものであった。また、面接調査を行った米国サンフランシスコ市に在住する一人の後期高齢者は、シニアハウスに居住していたが、共有施設を活用し様々な学びを行っていた。それと同時に、他の人へのボランティア活動も積極的に行い、知的な衰えはなく、心理的社会的にも、健康で、働き続ける人、まなび続ける人であった。

総合考察として、これらの結果より我が国が直面する未曾有の超高齢社会における大学および大学生が高齢者施設や地域と連携して、世代間交流を行う可能性について論じた。

キーワード：大学教育，世代間交流，CCRC，課外授業，放課後の学び

*教授 発達心理学

**非常勤講師 教育心理学

***教授 発達心理学

****東海学院大学

*****助教 臨床心理学

問題と目的

我が国は、まだ人類が経験していない未曾有の超高齢社会に突入しようとしている。本研究は、人はいくつになってもまなび続ける存在であり、主体的な活動としての「まなび」が高齢者ばかりか大学生にとってもこころ（脳機能）の健康につながるという視点に立って、高齢者と大学生とのまなびを介した世代間交流の可能性を模索しようとするものである。

大学生は通常は大学で授業を受けているので、世代間交流の可能性のある時間は、放課後や長期休暇などの自由な時間に限られるであろう。放課後や長期休暇中は、教育課程に基づいて学ぶ学習活動とは異なり、学生自身や家庭の主体性を生かしたさまざまな学びや活動が自由にできる時間であり、学生にとって、今後の発達や学習、キャリア形成に重要な機会となっている。これまで我々は小学生から大学生までの放課後の生活について調査をしてきた（蓮見，他 2013, 2014, 2015, 2016）。昨年、あらためて大学生の放課後の生活について大規模調査を行ったので、高齢者とのまなびを介した世代間交流の可能性を探る意味から、まなびを中心とした大学生の生活実態について明らかにすることとした。したがって、本研究の第一の目的は、大学生が通常の授業がある放課後、どのように過ごしているか、充実して過ごしているのか、その生活実態を把握することである。そして、先行研究（蓮見，2016, 2015）で明らかにした放課後の活動領域（まなび、運動、家族、交友、のんびり）のうち、「まなび」への指向性が自己同一性、適応行動とどのように関連するのか調べることで、放課後の「まなび」が大学生の自己同一性を促し、モラトリアムの長期化を防ぐのか、不適応行動の発生を抑制するのかについて検討する。さらに、大学生と比較するために、中学生・高校生の放課後の生活の調査も行ったので、本報告では放課後のまなびという観点に絞って、報告する。

本研究の二つ目の目的は、高齢者の「まなび」の意識を明らかにすることである。高齢者は加齢ゆえに個人差はあるものの退行、衰退しているとみなされ、定年後は無為に過ごしていると考えられがちである。しかしながら、団塊の世代が定年を迎えた今日、多くの高齢者はアクティブに活動している。経済的にも、体力的にも恵まれた人々が多く、スポーツクラブにも、ゴルフ場にも、町の集会場にも、趣味の教室にもあちこち出没し、活動し、購買意欲も盛んで、影響力が大きい世代である（65～70歳の要介護率1.4%）。こういった世代の人々が10数年後には後期高齢者となり、いよいよ介護支援を受け始める時期がくる（80～85歳の要介護率18.7%）。本報告の第二の目的は、長寿化・高齢化の先進国である米国の高齢者施設を訪問し、実際に入居している後期高齢者に面接をして、施設生活者のまなびの実態とまなびの意識を明らかにすることである。

まなびを介した世代間交流の可能性を探る

さらに、今後おとずれるであろう未曾有の超高齢社会に対して、高齢者と大学生の主体的な活動としてのまなびが、高齢者ばかりか大学生にとってもこころ（脳機能）の健康につながるのではないかという仮説を立て、結果を踏まえて、高齢者と大学生とのまなびを介した世代間交流の可能性を模索しようとするものである。今日、若い人々は、社会が便利になり、家族を持たずとも、一人でも生きられる時代となり、また、現在の雇用状況の不安定さや将来の不安から、結婚年齢が高齢化し、結婚しない人々が増大して、少子化に歯止めがかからない現状となっている。現在の我が国は、世界でも平和でかなり恵まれた国の一つであるにもかかわらず、そして、戦争もなく、食料難もなく、飢餓もなく、人口抑制政策もしていないのに、年間の出生数が減り続け、100万人を切る勢いとなっている。我が国の人口ピラミッドを見ると、若い世代が極端に少なく、将来の自分たちの老後に不安を持ってしまうことは否めないであろう。他方、少子化の影響で、団塊の世代である前期高齢者は孫育てが少ないために、子ども世代への還元や次世代への社会的貢献が乏しい世代となっている。

現在の「安心・安全」ばかり追求して汲々とするのではなく、将来の「安心・安全」に投資すべき待ったなしの時期に来ていると思われる。上述のように、近未来に必ずおとずれる未曾有の超高齢社会においては、高齢者が健康に生き続けることが必要で、そのためには脳機能の低下を防ぐことが必須である。知的好奇心を持ち続けるには、若い世代との交流が欠かせない。

今日の我が国の大学生は、アルバイトやボランティアだけでなく、大学の授業や実習でも高齢者と交わるという経験はほとんどない。今後は、我が国の大学も長寿先進国のように、地域

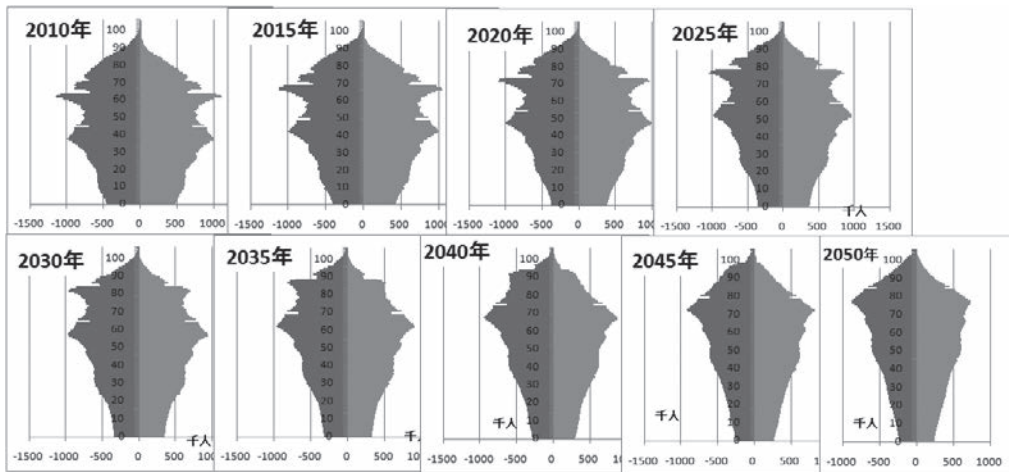


図1 我が国の人口ピラミッド（2010年～2050年）

に開かれた大学を目指し、大学が地域の高齢者のコミュニティセンターの役割を担うことが期待されるであろう。米国にあるカレッジ型 CCRC を参考としつつも、我が国における、地域のコミュニティとしての大学と CCRC など高齢者コミュニティとの大学発の連携プログラムの開発が必要となるであろう。

研究 I

目的

本研究の目的は大学生の放課後のまなび・生活に関する実態および意識を調査研究により明らかにすることである。先行研究（蓮見, 2015, 2016）で明らかにした放課後の活動領域（まなび, 運動, 家族, 交友, のんびり）のうち、大学生のまなびへの指向性が自己同一性, 不適応行動とどのように関連するのか, 放課後のまなびが大学生の自己同一性を促し, モラトリアムの長期化や不適応行動の発生を防ぎ, 適応的な行動を促すのか, などについて検討する。さらに, 大学生の放課後のまなびの実態を高校生・中学生の放課後のまなびの実態と比較, 検討する。

方法

調査対象者①：(大学生)

大学生 546 名（性別：男子 297 名, 女子 249 名。学年：1 年生 204 名, 2 年生 143 名, 3 年生 116 名, 4 年生 83 名。）

大学において, 研究者が配布, 回収した。

調査項目：(大学生用)

我々がすでに行ってきた小学生から高校生までの放課後の調査で使われた項目を吟味して, 大学生の放課後の行動として考えられた 27 の質問項目を設定した。

回答：評定はいずれも, この 1 ヶ月間の放課後（平日）にしたことを, 0 日（ぜんぜん）, 1 日（たまに）, 2 から 3 日（ときどき）, 4 日（よく）, 5 日（いつも）の 5 件法で回答を求めた。

放課後の生活調査項目に, 一群には時間的展望体験尺度（白井, 1994）の未来観に関する 2 下位尺度に 2 項目版自尊感情尺度（箕浦・成田, 2013）を付加した質問項目（自尊感情尺度を付加するのは, 両群の分量の調整・公平性のためと「いま」に関してのとらえ方を, 未来展望と対照させるねらいによる。）を, もう一方の群には, 日本語版 GHQ-12（中川・大坊, 1985）の 12 項目版を付加した。

その他：アルバイトなどについてたずねた。

調査方法

大学生の調査対象者を2群に分けた（実際には、2種類の用紙を混ぜてほぼ無作為に分かれる形で実施した）

調査日時：

大学生調査は2015年7月に実施された。

調査対象者②：（高校生・中学生）

Web調査（クロス・マーケティング社）に参加した400名。

中学生200名：親が回答した（性別：男子105名，女子95名。学年：1年生63名，2年生76名，3年生61名）

高校生200名：（性別：男子118名，女子82名。学年：1年生51名，2年生61名，3年生88名）

調査項目（中学生・高校生用）

中学生・高校生の放課後生活評価尺度を構成する項目として，放課後の過ごし方を具体的な行動としてとらえる27項目を設定した。併存尺度として，学校不適応尺度を使用した。

回答：評定はいずれも，この1ヵ月間の放課後（平日）にしたことを，0日（ぜんぜん），1日（たまに），2日から3日（ときどき），4日（よく），5日（いつも）の5件法で行うものとした。

調査日時：Web調査は2015年3月に実施された。

結果

1. 因子分析による因子の抽出（大学生の放課後の生活の領域）

27項目より，共通性の低かった項目，因子負荷量が.35満たなかった項目を除いて因子分析（主因子法・プロマックス回転）を繰り返すと，21項目が残り，以下の結果が得られた。

第1因子は，『運動』，第2因子は『まなび』，第3因子は『のんびり』，第4因子は『交友』，第5因子は『家族』と名付けた。（表1参照）

2. まなびの領域の項目と他の領域の項目との関連性

『まなび』項目6項目と，他の項目との関連性（Spearmanの相関係数）を算出した r の値と有意確率を表2に示した。

『まなび』の項目のうち，「専門書を読んだ」，「資格試験のための勉強をした」，「大学の勉強の予習・復習をした」，「読書をした」，「大学の課題を作成した」は，『運動』と『交友』の領

表1 因子分析の結果（パターン行列 a）

	因子				
	1	2	3	4	5
運動をした	.930				
体力づくりをした	.748				
スポーツ活動をした	.725				
専門書を読んだ		.715			
資格試験のための勉強をした		.591			
大学の勉強の予習・復習をした		.574			
読書をした		.519			
パソコンを使って作業した		.481			
大学の課題を作成した		.367			
のんびりした			.845		
ごろごろして過ごした			.815		
ゲームをした			.421		
外食を楽しんだ				.638	
友人と遊んだ				.606	
親しい異性と過ごした				.514	
SNS で交流をした				.510	
買い物に出かけた				.415	
音楽を聴いた				.363	
家族と雑談をした					.959
テレビを見た					.440
家族と出掛けた					.378

域の項目と相関を認める項目が多かった。「パソコンを使って作業した」は『のんびり』と『家族』とに相関があった。

3. 『まなび』の項目と他尺度との関連性

表3に『まなび』項目と他の尺度との相関係数を示した。時間的将来展望体験尺度のうち、『将来計画目標準備』の得点は、「専門書を読んだ」、「資格試験のための勉強をした」、「大学の勉強をした」、「読書をした」と相関があった。逆に『将来展望なし』は「資格試験のための勉強をした」($p < .05$), 「大学の勉強の予習・復習をした」($p < .01$)と負の相関があった。

自己肯定感尺度の下位尺度のうち、『よい素質がある』、『好ましく感じる』は「資格取得のための勉強をした」、「大学の勉強の予習・復習をした」と相関があった。自己採点による『放

まなびを介した世代間交流の可能性を探る

表2 まなびの項目と他の領域の項目との関連性 (r)

領域	項目	専門書を読んだ	資格試験のための勉強をした	大学の勉強の予習・復習をした	読書をした	パソコンを使って作業した	大学の課題を作成した
まなび	専門書を読んだ	—	.463***	.350***	.375***	.282***	.229***
	資格試験のための勉強をした	.463***	—	.451***	.263***	.182***	.115**
	大学の勉強の予習・復習をした	.350***	.451***	—	.289***	.209***	.292***
	読書をした	.375***	.263***	.289***	—	.265***	.158***
	パソコンを使って作業した	.282***	.182***	.209***	.265***	—	.401***
	大学の課題を作成した	.229***	.115**	.292***	.158***	.401***	—
	運動をした	.149***	.162***	.130**	.126**	.011	.111**
運動	体力づくりをした	.167***	.202***	.168***	.160***	-.003	.120**
	スポーツ活動をした	.162***	.209***	.135**	.095*	.002	.093*
	のんびりした	.016	-.050	.020	.047	.168***	.038
のんびり	ごろごろして過ごした	.076	-.038	-.035	.002	.182***	.035
	ゲームをした	.170***	.066	-.008	.150***	.307***	.051
	家族と雑談をした	.097	.105*	.147***	.198***	.181***	.077
交友	家族と雑談をした	.097	.105*	.147***	.198***	.181***	.077
	テレビを見た	-.012	-.017	.126**	.021	.115**	.097
	家族と出掛けた	.161***	.203***	.196***	.215***	.143**	.214***
	サークル活動をした	.112**	.104*	.113**	.060	.008	.098*
	家事をした	.152***	.108*	.167***	.154***	.112**	.170***
	ボランティア活動をした	.258***	.222***	.146**	.171***	.033	.126***
その他	ホームページや掲示板を見た	.223***	.162***	.175***	.246***	.307***	.174***
	就職活動をした	.310***	.195***	.124**	.194***	.131**	.083

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

表3 『まなび』の項目と他尺度との関連性 (r)

尺度	項目	専門書を読んだ	資格試験のための勉強をした	大学の勉強の予習・復習をした	読書をした	パソコンを使って作業した	大学の課題を作成した
将来展望体験	将来計画目標準備	.222***	.335***	.382***	.206***	.128*	.117
	将来展望なし	-.001	-.151*	-.192**	-.029	.126	.118
	自信と希望	.037	.062	.190**	.158*	.019	-.014
自己肯定感	よい素質がある	.084	.157*	.213**	.085	-.029	.041
	好ましく感じる	.055	.206**	.175**	.034	.026	-.011
放課後の充実度		-.028	.078	.177***	.057	.021	.11

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

課後の充実度』得点は、「大学の課題の予習・復習をした」と相関があった。

4. 学生の放課後—アルバイト

我が国においては、長く続く不況の影響もあり、経済的にきつい家庭の子女も多く、多くの大学生はアルバイトをしている。そこで、放課後の生活のうち日数的にも、時間的にも多くを占めると思われるアルバイトについて尋ねた。まず、大学以外で、平日5日中数回は出向く場所はどんなところかという問いを行い、その次にアルバイトの事について尋ねた。結果を図2、表4、図3に示す。それによると、大学の帰りに立ち寄りところでは、店（買い物）が最も多く、次いでアルバイト先であった。それ以外の場所としてダブルスクール、スポーツクラブ、友だちの家、恋人の家、習い事などをたずねたが、ほとんどなかった。

「あなたは現在アルバイトをしていますか」とたずねると、1年生からアルバイトをしている学生が多く、学年が上がるにつれ、増大していた。1年生では66%の学生が、2年生から4年生では各学年およそ70%の学生がアルバイトをしていた。

さらに、アルバイトをする目的を尋ねると、「お金のため」と答える学生が圧倒的に多かった。

5. 大学生の取りたい資格

現在の学生は資格取得志向といわれている。実際にどのような資格を取りたいのか、取ろうとしているのか、たずねた。調査した大学の専攻によるであろうが、教員免許状が最も多く、

まなびを介した世代間交流の可能性を探る

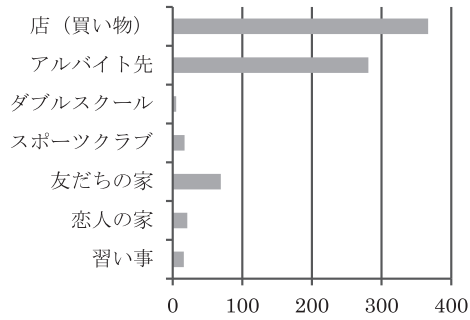


図2 大学以外で、平日5日中数回は出向く場所はどんなところですか

表4 アルバイトをしていますか

学年とアルバイトのクロス表

度数

		アルバイト				合計
		していない	週1～2回	週3～4回	週5回以上	
学年	1年生	70	37	85	12	204
	2年生	43	30	60	10	143
	3年生	35	24	42	15	116
	4年生	25	22	32	4	83
合計		173	113	219	41	546

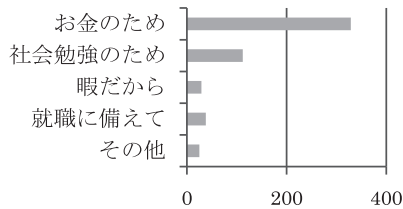


図3 アルバイトをする目的は何ですか。

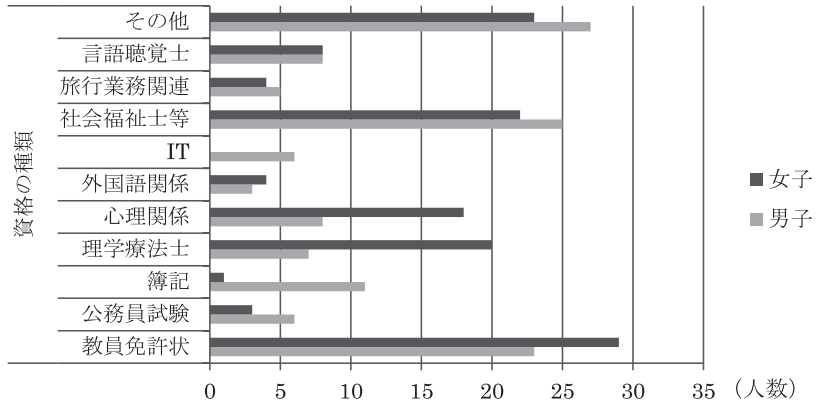


図4 取りたい資格

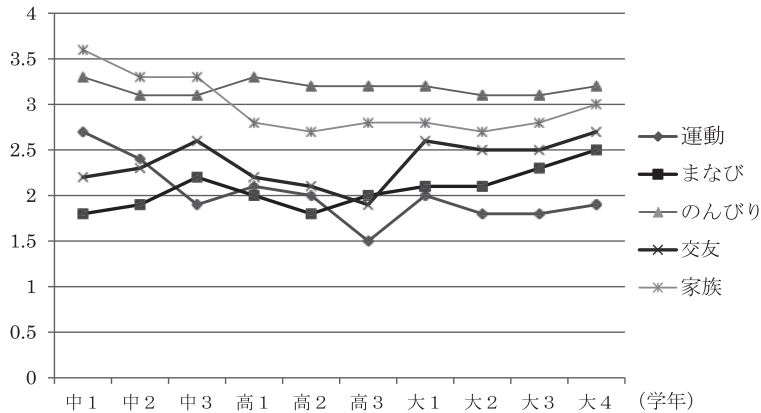


図5 中学生・高校生・大学生の放課後生活の構造の学年別検討

次いで、社会福祉士、理学療法士、心理関係、言語聴覚士、簿記の順だった。

6. 中学生・高校生・大学生の放課後生活の構造

1) 放課後の活動の5つの領域の学年別変遷

中学生・高校生の放課後の活動を5領域に分類し、大学生と対応、比較できるようにした。

『運動』は全体としてあまり頻度は高くなく、中学1年生がピークで、中3、高3で下がっていた。『のんびり』はどの学年でも高かった。『交友』は学年とともに緩やかに上昇していた。『家族』は中学生で高く、学年が上がるとともに若干減っていた。『運動』と『まなび』はどの

学年でもおよそ2～2.5、『のんびり』は3～3.5であった。

『まなび』は中学生では、中3で高いが、高校では中学生より、幾分下がっていた。大学生では学年があがるにつれ上昇していた。しかしながら、それらの学年ではその分、『運動』が減っていた。

2) 中学生と高校生：差異のあった行動項目

表5に中学生、高校生それぞれにおいて、平均得点に差異があった項目を示した。中学生では、男子に比べ、女子の『運動』領域の項目（「屋内外で運動をした」、「運動をした」、「体をよく動かした」）と「ゲームをして遊んだ」の得点が有意に低かった。

高校生では、女子は男子に比べ、「ゲームをして遊んだ」が有意に低く、「家事をした」が有意に高かった。他方、「あなたの高校は進学校ですか」を（はい、いいえ）で尋ねたところ、「はい」と答えた学校に通っている高校生は「いいえ」と答えた高校生に比べ、『まなび』の領域の項目である「宿題をした」、「本を読んだ」、「試験勉強をした」で有意な差異が見られた。

表5 中学生と高校生：差異のあった項目

中学生				
<男子-女子>	男子 (N = 105)		女子 (N = 95)	p-value
屋内外で運動をした	2.59	>	1.92	0.01
運動をした	2.83	>	2.03	0.001
体をよく動かした	2.79	>	2.14	0.05
ゲームをして遊んだ	3.62	>	2.57	0.001
高校生				
<男子-女子>	男子 (N = 118)		女子 (N = 82)	p-value
ゲームをして遊んだ	3.06	>	2.56	0.001
家事をした	1.80	<	2.22	0.05
<高校のレベル>	high level schools (N = 84)		Standard level schools (N = 86)	p-value
宿題をした	2.37	>	1.55	0.001
本を読んだ	2.17	>	1.47	0.001
試験勉強をした	2.55	>	1.41	0.001
運動をした	1.87	>	1.48	0.05

表6 放課後の充実度と自己肯定感の相関
相関係数

		放課後の充実度	自己肯定感
放課後の充実度	Pearson の相関係数	1	.305***
	有意確率 (両側)		0.001
	N	395	125
自己肯定感	Pearson の相関係数	.305***	1
	有意確率 (両側)	0.001	
	N	125	247

***. 相関係数は0.1%水準で有意 (両側)。

さらに「運動をした」も進学校の高校生の方が高かった。

3) 放課後の充実度と自己肯定感の相関

表6に示すように、放課後の充実度と自己肯定感の相関をみたところ、 $r = .305$ で $p < .001$ の相関があった。

考察

今回の我々の放課後の生活に関する調査研究では、『まなび』は中学生では、3年生が最も多かったが、高校では全般に中学生よりまなびが少なかった。高校生の放課後の過ごし方で、進学校と普通校で、『まなび』に大きな差があった。大学入試が安易になった今日でも、進学校の高校生はかなり勉強しているようだが、一般の高校に通う高校生はあまり勉学に勤しんでいないようであった。では、運動をしているかと、それも少なかった。『運動』は高校生では全体としてあまり頻度が高くなく、中1がピークで、中3、高3で下がっていた。高校生の放課後の生活の充実が求められるように思われた。

また、大学生ではアルバイトに勤しんでいる実態が明らかになった。しかし、大学生では、学年が上がるにつれて資格を取ろうとする目的意識がはっきりしてくるのか、『まなび』の時間が長くなっていた。卒業や資格取得のための学びが行われているようすがうかがえた。

『のんびり』は全般に学年が上がるにつれ増大していた。

また、大学生において、放課後生活の充実度と自己肯定感との間には相関 ($r = .305$) があった。さらに、時間的将来展望体験尺度のうち、『将来計画目標準備』の得点は、「専門書を読ん

だ]、「資格試験のための勉強をした」、「大学の勉強をした」、「読書をした」とに相関があった。すなわち、『将来計画目標準備』の得点の高いものはまなび意識が高く、主体的、能動的に学習しているといえよう。さらに、『まなび』は自我同一性の獲得と関連性があった。逆に『将来展望なし』は「資格試験のための勉強」($p < .05$)、「大学の勉強の予習復習」($p < .01$)と負の相関があり、まなびが少ない学生は自我同一性の獲得の不十分さを示しているといえた。多くの学生は、アルバイトをせざるを得ないが、学年が上がるにつれ進路もはっきりしてくると、資格取得志向性が高くなり、卒業や就職のための勉強など、「まなび」に勤しむようすが窺えた。

研究 II

目的

一口に高齢者といっても、その意識や生活実態は、年齢によっても、仕事をしているか否かによっても、性によっても、経済状況によっても、住まい方によっても、個人差が大きいと思われる。80歳以降の高齢者では施設に入所している高齢者も多くなるので、施設に出向き、入所している高齢者に面接調査をし、どのようなまなびを行っているのか、その種類にはどのようなものがあり、自分のまなびたいことができているのか、まなびの意識を調べ、まなびへの意識や実際がこころの健康（うつを軽減、認知症の発症の遅れ）に関連するのか、明らかにする。

本研究では高齢・長寿社会の先進国である米国の高齢者施設に入居する一人の後期高齢者を対象に、半構造化面接調査を行い、高齢者のまなび・生活についての意識を明らかにした。質問内容としては、これまでの我々が行ってきた放課後の研究で明らかになった5つの活動領域（まなび、交友、家族、運動、のんびり）と、それらに加えて、住まい環境、仕事の有無、時間展望などの意識についてである。

方法

米国カリフォルニア州サンフランシスコ市にある高齢者が暮らす CCRC を訪問し、CCRC における高齢者のまなびの実態を面接調査した。CCRC とは、サポート付き住宅（supportive housing）のことで、アメリカでは一般的に、食事、送迎、ハウスキーピング、身体ケアなどのサービスがついた集合住宅のことをさす。明確な定義はなく、全国的にその実態が把握しにくいのが現状だそうで、連邦政府も、サポート付き住宅に住む高齢者の割合は、全高齢者の2%

から5%と幅を持たせて報告しているそうである。火事の時に一人で逃げられるというのが入居時の条件だそうである。

サンフランシスコ市の中心部にあり、オペラハウス、コンサートホール、美術館、市民ホール、病院、大学などが徒歩圏内で、屋上からはゴールデンゲートブリッジが見えるという高台に建つ26階建ての超高級CCRCセコイアを2016年9月に訪ねた。

調査協力者

82歳の高齢者の男性（日系2世のN氏）

手続き

N氏が施設内を案内してくれるなかで、半構造化面接調査を行った。高齢者施設での生活の実態、まなび、家族、のんびり、運動、交友の5領域について尋ねた。それらに加え、住まい環境、仕事（ボランティア）の有無、将来に対する時間的展望などを尋ねた。

結果

● N氏の生い立ち

N氏は明るく気さくな人柄で、日系2世としてサンフランシスコ市で生まれ、小学校、中学の時に日本で過ごしたが、高校、大学はアメリカに戻って学んだそうだ。学校で日本語も英語も学んだので、読み書きも会話も不自由はないとのこと。連邦政府の税関係の機関で働いていたそうで、銃、酒などの販売を規制許可する仕事をしていた。調査してちゃんとした人なら許可を出し、その後、税の支払いを監視するという部署。N氏の家はサンフランシスコ市の郊外にあり、自宅は売らずに、人に貸しているとのこと。「ここに入る人はお金がないと難しいです。」と話していた。奥さんは東京の短大を出てから米国に来たので、日常会話には不自由しないが、難しい英語の文章はあまり得意ではない。奥さんは、家では一世の自分の両親と同居し、日本語で話していた。子どもたちとも日本語で話すとのこと。

● 交友

廊下で他の居住者やスタッフと会うたびに、皆、知り合いのようで楽し気に、挨拶していた。

● 家族

奥さんと一緒に10年ほど前より入居している。従弟がかつて住んでいたの、ここに住まおうとして何回か訪問してから2、3年待って入居したとのこと。子どもが2人いる。2人とも家庭を持ち、独立している。ここの高齢者施設に入居することは快く賛成してくれた。N氏は、自分たちは両親の介護で苦勞したので、子どもたちには自分たちの介護をさせたくない

思ったそうである。奥さんはあまり社交的ではないようすで、食堂に行っても「どこのテーブルに座っていいのかわからない、何を話していいのかわからない」と不安げに言うとのこと。日系人なので、自分たちに偏見を持つ人がいるかもしれないと思って、打ち解けられないところがある。自分で壁を築いてしまっている。

●生活の実態

サンフランシスコ市はバス、電車、タクシーなど公共交通機関が発達していて、どこに行くのも便利。気候もよい。しかもセコイアは街の中心にあるので、オペラやコンサート、美術館、大学など自由に行ける。N氏の住まいは北向きの22階で、部屋は1ステュデオで、居間と1ベッドルーム。大きな寝室には大きな鏡のついた収納スペースがあり、玄関をあけると小さなキッチンとバストイレがあった。食事は食堂でするのでキッチンはあまり使っていない。栄養は管理されており、しかも隣にある診療所で常に血圧などチェックしてくれるので、入居してから皆10年以上生きていたとのこと。「食事の時は、エレベーターが混んでなかなか乗れない」と笑いながら話していた。窓いっぱいカーテンが開けられ、部屋はとても明るかった。はじめ、3階から7階の低層階を希望して3階に住んでいた。3階は前のマンションが見えるだけで眺めが悪かった。ところが、その後、経営者から、3階を介護施設に改造するので、出て行くようにと言われた。「別の部屋を用意して欲しい」と言ったら、値段は変わらず、高層の北向きの22階に移れた。1週間に一回部屋の掃除をしてくれ、ベッドのシーツを換えてくれるリネンサービスもある。

机で書き物をしたり、本を読んだり、テレビを見たり、下に降りて共用部で過ごすことも、外出も自由。以前は運営委員だったので、よく会議に参加していたとのこと。ボランティア活動をよくしたとことで表彰された年もあった。地下には一部屋ずつロッカーがあり、スーツケースや本をいれた段ボールなどを置いている。洗濯スペースも各階にある。ごみは各階から専用のごみ箱に入れて捨てることができる。

●居住者について

居住者は約400人。大学の教授でPh.Dを持っている人、看護師を長くしていた人、など女性でも職業を持っていた人が多い。独身で子どもがいない、子どもがいても子どもの世話になりたくない、郊外の大きなうちに住んでいたが、車に乗らなくなったので、便利なところに移りたい、などの理由で入居するようだ。確かに、ここに入る人はお金がないと難しい。女性の高齢者でひとり住んでいる人が多い。入居者はアメリカ全国から集まってきている。中国系10人、日系20人くらいで、そのほか、ヨーロッパや中央アジア、などの出身の人もある。入所する際の紹介として、その人の生まれた場所を世界地図の上にピンで表していく。



高台に建つ 26 階建ての CCRC



中に入ると 7 階の天井まで吹き抜けの食堂

●まなび、仕事、ボランティア（運営委員会）

居住者は、自分たちのコミュニティを自分たちで運営していくために 10 人くらいで運営委員会を作っている。代表はプレジデントと呼ばれ、現在は女性。運営委員にも女性が多い。その下部組織として、文科系員会、図書委員会などがある。どのようなコンサートをするのか、どのような生活の仕方にするのか、委員会が決める。リクレーションの計画も行う。ホールの一つでは、講演会が行われたり、別のホールでは服の展示販売場としてブティックに貸していた。ショップがあり、居住者が必要とするものが販売されていた。ショップで働く人はボランティアの居住者。その収益でコンサートを開いたり、図書を買ったりすること。廊下に、1 年間で一番多くボランティアをした人に贈られる賞状が飾ってあった。

NPO の経営だが、オーナーが何かしたいときは運営委員会にはかる。絨毯を換える、その色はどうするか、など。廊下の花も 1 か月ずつ各部屋の人が交代で提供する。

●共有施設について

食堂は 7 階までの吹き抜けの大食堂で、好きなテーブルについて 3 食自由にとることができる。普段は飾りつけはないが、祝日となるとお花が各テーブルに飾ってあったり、ワインも自由に飲める。自分で食べたいものを取れる人と、介助が必要な人に分かれて座る。ビュッフェだがメニューは 1 週間ごとに配られる。

食堂の入り口には、大きなソファがいくつもおかれていた。食堂の隣にはコンサート、映画、ヨガ教室などの催しが行われるホールがあった。

屋上からの眺めは良く、ゴールデンゲートブリッジや海が見えた。ドックランコースもあった。

まなびを介した世代間交流の可能性を探る



5000冊以上の蔵書のある図書室



絵画制作や、木工などできる部屋

●高齢者のまなびをささえる共有のスペースとサービス

- ・図書室 5000冊以上あり、自分の著作がある人もいるとのこと。亡くなった人が置いていく本も多数ある。
 - ・廊下には、居住者が描いた絵が飾ってあった。1～2か月で取り換えるとのこと。絵を描く部屋では好きな時に自由に絵を描くことができるように、絵具や筆が用意されている。絵の先生が1週間に1日教えに来る。この部屋を使う人はある程度決まっているとのこと。
 - ・工芸室、木工室、ビリヤード室、ゲーム室、CD室、などがある。
 - ・トレーニング室には、トレーニングマシンがおいてあって、各自体を鍛えられる。先生が来て体の調子を整える理学療法室もある。
 - ・ホールはコンサートやヨガ教室を開催。談話室、集会室、プールもある。
- その他に、飼育栽培、大学の講義が聞けるサービス、外出サービスなどが行われ、シニアのまなびを支えていた。

考察

米国にある CCRC はいわゆるサービス付きの高齢者住宅だが、日本と違って、どうしようもなくなって、ギリギリになってから入るのではなく、元気うちに自分から住まいを移す。居住者は運営委員会を作って自主的、主体的に共有スペースなどの使い方や生活の仕方などを決める。日本にも最近東急線の駅前などに高級な高齢者住宅ができていますが、至れり尽くせりの「お客様」という考え方だったり、高齢者を車いすや施設に閉じ込めることが多く、高齢になっても「はたらけるひと、まなびつづけるひと」という考え方は少ない。

サンフランシスコ市の中心部に建つ26階建ての CCRC セコイアは、オペラハウスやコンサー

トホール、大学など徒歩圏内であり、施設内には、シニアの「まなび」を支える部屋が数多くあった。また高齢者でも、自分で歩いたり、外出することが前提で、週5日の外出援助サービスもあった。

アメリカには広大な国土、広大な農地、工業用地、数多くの美しい都市、港、ジョン・ミュールのトレッキング運動から始まった国立公園など大切にされた自然があり、海辺の市場やショッピング街は若い人々、しかも様々な人種の人々であふれていた。また、世界中から学生が集まり、大規模で研究レベルの高い大学がいくつもある。アメリカはつくづく豊かな国だと思う。我が国は国土も小さく、資源もなく、その割にはよくやっているなあという印象もあった。アメリカでは、超高級 CCRC のようなシニアハウスで豊かな老後を過ごす高齢者もいればホームレスの人もいて、確かに格差社会である。一昨年訪れたロサンゼルスでもそうだったが、ホームレスの人の大部分は高齢の精神障害者のようだった。人々の集まる駅のホームや高級ブランド店が立ち並ぶショッピング街で物乞いをしていた。

通常、シニアになっても、人はまなびたいという要求をもち続けるものである。そして、それが健康な老後をささえると思われる。一般に CCRC には、健康管理や医療チェック（クリニック、理学療法室）、芸術活動（絵画室、木工室）、音楽美術鑑賞（CD 鑑賞、オペラハウスやコンサートホールまで送迎するサービス）、身体活動（アスレチックジム、プール）、集会室、ゲームコーナー、ビリヤード室、図書館などがあり、さらに、飼育栽培、談話、大学の講義が聞けるサービス、運営活動、ボランティア活動などが行われ、シニアのまなびを多方面から支えていた。そして、これらの CCRC は皆明るくきれいで、居住者ははつらつとしており、我が国の介護施設のように、ベッドに寝かされ、車いすで食堂に運ばれ、食事を口に運ばれ、テレビの前に一日いるというようなことはなく、自分の足で自由に街を歩いていた。

総合考察

孤立した高齢者は聴覚障害、認知症を引き起こしやすいといわれている。高齢者のまなびをささえるのは、世代がことなる人々であり、世代間交流が欠かせないといえる。

しかしながら、これまでの我々の放課後の生活調査でも、大学生が高齢者との世代間交流の場に関わることはほとんどなく、放課後の大部分を大学生は居酒屋、コンビニ、レストラン、などでアルバイトしており、学生が大学で学んで、将来、介護福祉士、理学療法士、看護師、言語聴覚士、教師などになろうと望んでいたとしてもそれらの職種とはまったく関連がない業種であることが多い。米国では、大学での授業の中で、医療実習として CCRC などに出向き、

触れ合う機会があるが、我が国の大学生では、アルバイトやボランティアだけでなく、実習でも高齢者と交わるという経験はほとんどない。

我が国では十数年後には、さらなる少子・超高齢社会が到来し、85歳以上の高齢者が人口の25%近くになると予想されている。欧米の高齢化先進国では、すでにさまざまな高齢者のコミュニティが作られ、よりよい生活・学びについての試みがなされている。高齢者のコミュニティ CCRC (Continuing Care Retirement Community) は大学の敷地に隣接して作られることも多く、大学との連携も盛んにおこなわれている。欧米では、高齢者は日本と違って、元気なうちに自分から住まいを移し、そこでは、居住者が運営委員会を作って自主的、主体的に共有スペースなどの使い方や生活の仕方などを決める場合が多い。日本の高齢者住宅では、高齢者を施設に閉じ込めることが多く、高齢になってもひとは「はたらけるひと、まなびつづけるひと」であるという考え方は少ない。

米国では長寿化の進行により、健康で活動的な高齢者が増加したことで、従来の高齢者施設で提供されていた趣味活動やゴルフなどのアクティビティだけでは高齢者のニーズへの十分な対応が難しくなり、高齢者のニーズは生涯学習などに代表される知的欲求を満たすアクティビティへと拡大したのである(宇都, 岡村, 2004)。米国のある CCRC では、居住者は大学の講義を聞いたり、芸術・木工の手ほどきを受けたりしていたし、別の CCRC ではリハビリや看護の医療系の大学生が実習の場として出入りしたり、大学のナーシング・スクール、ファーマシー・スクール、ソーシャルワーク・スクール、大学リタイアメント協会と提携を結び、入居者の健康や文化活動に役立っていた。通常、施設内には、絵画、木工、手芸、図書室、集会室、理学療法室、トレーニングルームなど、シニアの「まなび」を支える部屋が数多くあった。高齢者は生涯まなぶひとなのである。

我が国の大学も地域に開かれた大学を目指し、超高齢社会を迎える今後は大学が地域の高齢者のコミュニティセンターの役割を担うことが期待されている。我が国において、大学と CCRC の連携プログラムを開発するために、臨床発達心理学的観点から、米国にあるカレッジリング型 CCRC を参考としつつも、大学が地域のコミュニティの中心となり、高齢者にも大学生にも互恵的、適応的なプログラムを大学発で開発する必要がある。

参考文献

蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・佐藤哲康・生駒忍(2016). 中学生・高校生・大学生の放課後の生活—横断的検討— 日本教育心理学会総会発表論文集 (58), 662.

Motoko Hasumi, Yasuko Kitahara, Kentaro Kawashima, Tetsuyasu Sato, and Shinobu Ikoma After School Hours of Current Junior High School and High School Students in Japan 31th International Congress of Psychology, Yokohama, 2015

北原靖子・生駒忍・佐藤哲康・蓮見元子・川嶋健太郎 (2015). サードエイジャーにおける児童支援活動への参加継続要因の検討: 放課後子ども教室の地域ボランティア面接から 日本教育心理学会総会発表論文集 (57), 254.

蓮見元子・北原靖子 (2015). 高校生用放課後生活空間評価尺度の作成. 日本心理学会

蓮見元子・北原靖子 (2015). 放課後の子どもの生活に関する比較研究—地域や学校が子どもの生活に与える影響について— 川村学園女子大学子ども学研究,

北原靖子・佐藤哲康・蓮見元子・生駒忍・川嶋健太郎 (2015). ボランティア活動継続に寄与する諸要因の検討—放課後子ども教室地域サポーターの語り事例から 川村学園女子大学研究紀要, 26, 1, 101-118.

北原靖子・高橋伸子・石川真理子・坂口佳江・土田宣明・吉田甫 (2015). 高齢者学習活動に伴うコミュニケーションの特徴と機能 日本心理学会第79回発表論文集, 313.

北原靖子・川嶋健太郎・佐藤哲康・生駒忍・蓮見元子. (2015). 児童の放課後の生活状況把握と影響要因の検討 — QOL, シャイネス, 学校適応およびサポート環境との関連— 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 277.

川嶋健太郎・北原靖子・蓮見元子 (2015). 放課後の子どもの居場所の評価と実態—全国自治体による放課後子ども教室事業の事業目標と評価指標. こども環境学研究, 10, 2, 73-78.

北原靖子・生駒忍・佐藤哲康 (企画・司会)・蓮見元子・吉田甫・川嶋健太郎・松阪宗久 (2015). 学校の「外」から学びを探る—学習が楽しくはかどる環境づくりに向けて— (話題提供). 日本心理学会第78回大会公募シンポジウム, SS (27).

生駒忍・蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・佐藤哲康. 放課後生活空間尺度 (児童保護者評定用) の作成 (1) 因子構造の検討 (2) 尺度の妥当性に関する検討 (3) 小学生の性別と学年による放課後の比較 日本心理学会第78回大会論文集, 1061, 1063, 1065.

川嶋健太郎・北原靖子・蓮見元子 (2014). ボランティアに参加する価値はいくらなのか?: 有償ボランティアにおける金銭的謝礼がボランティア参加動機に与える影響 東海学院大学紀要 (8), 169-177.

白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究 65 (1), 54-60.

箕浦有希久・成田健一 (2013). 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, 21, 1, 37-45.

中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引, 日本文化科学社